表現者の現場

東西の絵画技法融合

□42□画家　滝　純一さん

「すべて自画像なんです。戦争のような強烈な原体験もなく、また西洋美術の伝統がない日本に生まれ育った自分が、圧倒的な魅力の重みを持つ西洋絵画とどう向かい合えばよいのか、答えがわからず、はっきり主張できないもどかしさが、さまざま試行錯誤させてきた。一連の作品に通底する暗さは、現代社会が抱える予兆や葛藤を表現したものと理解されてきたのだが……。

金箔を張る前に赤ボーロの下地をメノウで磨く。吉貝技法に従って赤ボーロの下には石ころを12回塗り重ねている。「昔はこうした作業は職人がやっていたのですが、今は全部一人だから完成までおよそ4か月かかります」＝福岡県宗像市の福岡教育大研究室で＝大原一郎撮影

たき・じゅんいち　1944年長野県生まれ。1968年東京教育大大学院絵画専攻修了。67年以降二紀展に毎年出品、文部大臣賞（93年）などを受賞。ほかに日本青年画家展優秀賞、前田寛治大賞展佳作賞、岡崎の銅展河北倫明賞など。二紀会会員。福岡教育大美術科教授。福岡県宗像市在住。

「昔は『すっとカオスの中にいて、強靭が持てなくてふらふらしていた』というのがこれまでの道のりであったらしい。

ウィーン幻想派の影響を受けた初期の作品から、樹脂をモチーフに細密的な風景を描いた30歳代前半、ガラスや黒い犬にこだわり続けた30歳代後半、単語を描いた40歳代、果てしなく広がる金景色を描いた50歳代前半まで、作風は別人と思えるほど変わってきた。一連の作品に通底する暗さは、現代社会が抱える予兆や葛藤を表現したものと理解されてきたのだが……。

学生時代から二紀展で活躍し、異象絵画の新しい世界を切り開いてきたと評価されてきた。ところが本人に言わせれば、『すっとカオスの中にいて、強靭が持てなくてふらふらしていた』というのがこれまでの道のりであったらしい。

ウィーン幻想派の影響を受けた初期の作品から、樹脂をモチーフに細密的な風景を描いた30歳代前半、ガラスや黒い犬にこだわり続けた30歳代後半、単語を描いた40歳代、果てしなく広がる金景色を描いた50歳代前半まで、作風は別人と思えるほど変わった。

「すべて自画像なんです。戦争のような強烈な原体験もなく、また西洋美術の伝統がない日本に生まれ育った自分が、圧倒的な魅力の重みを持つ西洋絵画とどう向かい合えばよいのか、答えがわからず、はっきり主張できないもどかしさが、さまざま試行錯誤させてきた。一連の作品に通底する暗さは、現代社会が抱える予兆や葛藤を表現したものと理解されてきたのだが……。

学生時代から二紀展で活躍し、異象絵画の新しい世界を切り開いてきたと評価されてきた。ところが本人に言わせれば、『すっとカオスの中にいて、強靭が持てなくてふらふらしていた』というのがこれまでの道のりであったらしい。

ウィーン幻想派の影響を受けた初期の作品から、樹脂をモチーフに細密的な風景を描いた30歳代前半、ガラスや黒い犬にこだわり続けた30歳代後半、単語を描いた40歳代、果てしなく広がる金景色を描いた50歳代前半まで、作風は別人と思えるほど変わった。

金景色を飛ぶ鳥、そしてたびたび出てくる『風』というタイトルに表れていた」

手がかりを得ようと、西洋絵画の技法の研究を始めたのは先輩のとき。イタリアやウィーンで古典絵画の技法を学び、各国の美術館に足を運んでは、ジョットやファン・アイク、ブリューゲルらの傑作を凝視して、細部までを詳細なメモに残した。犬の絵に油彩とテンペラの混合技法を用いたり、金景色に半透視図法を多層的に用いてみたりもした。

模索し天啓

あれこれ模索して、ようやく確信を持てないまま、1989年に文化庁派遣芸術家在外研修員としてポーランドに留学。イコン画（聖像画）技法を学んでいたとき、天啓があった。

「近景と遠景を金箔を介して結びつける、遠近法が発明される前の古典絵画の平面的な空間構成は日本画と同じであることに気付いたのです。我々が洋画と呼んでいるものも、自分たちの伝統と共通点がある。東西の接点というものが見えてきたとき、やっと自分の進むべき方向が見えてきた」

帰国後に描かれた一連の作品――イコン画のような空間の中に、中空、鳥かご、換気扇、傾りかけた果物といった静物が描かれていて、それぞれには象徴的な意味が込められている――は、吉貝技法を咀嚼して自らのものとしたという印象を受ける。黄金分割の構図やテンペラ特有の色彩を用いながらも、影に中間色でなく黒を用いたり、わざと背景の金箔をはがして下地の赤ボーロを浮き出させるなど、日本的な感性が表現されているからだ。

作品の制作過程はすべて学生に公開している。洋画に技術なんていらない、という人もいるが、やはり技法を正しく理解し、習得した上で、自分なりの表現を行うべきと考えるからだ。なぜ背景が手前の静物より暗く塗られているのか、学生には理解し難いようです。偶然技法はマスターしても、なぜそうでなければならないのか……。まだ自在に使いこなせないところがある。難しいところは学生と一緒にうーん、と考えています」

6月にもイタリア・フィレンツェを訪ね、ジョットの絵画の原点に立ち返ってみたい。常に学ぶ姿勢を忘れないことが、創作の原動力なのだろう。

（浜田和正）